

大会研究主題 解題 「国語科における『深い学び』とは何か」

私たち山口県は、小・中・高の共同の中国大会を2004年下関市、2014年防府市で開催しました。その研究の中で「校種は違っても、そもそも言葉の学びは連続している。」と考えました。そして、小・中・高を「貫く軸」が必要だと考えるようになりました。

そこで、「貫く軸」として、私たちは、授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」に着目しました。学習者自身が「深いなあ」と実感する学びを貫き、校種を超えてつなげたい。言葉と向き合い、自ら「言葉に対するものの見方・考え方」を仲間とともに再構築し、新たな自分の感性や認識を発見する。このような「深い学び」の姿をめざし、次のような大会研究主題をさだめたのです。

小・中・高を貫く言葉の学び ～ 国語科における「深い学び」とは何か ～

学習者の発する「深いなあ」は、言葉そのものへの「深い学び」から生まれます。

①わたしと小鳥とすずと

金子みすゞ

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわしのように、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのように、
たくさんうたは知らないよ。

②すずと、小鳥と、それからわたし、 みんなちがって、みんないい。

左の詩の「みんなちがって、みんないい」という結末の言葉には、差別のない平等な世界への願いがこめられています。しかし、詩の言語内容を読み取るだけでは「国語科における『深い学び』」は成立しません。

まず、この詩と出会い、自分の感じ方を言葉でとらえます。そして、仲間と対話します。例えば、学習者は、①②の傍線部の語順が逆になっていることに気づくかもしれませぬ。すると、「どうしてそうなのか」と問いが生まれ、もっと詩の言葉と向き合いたくなる。さらに対話を重ねながら、改めて作者の意図が「語順を変える」という表現の工夫に表れていることに気付いていきます。このような言語体験をとおして、言葉の力や働きが明らかになっていきます。そして「みんなちがってみんないい」の詩の言葉の働きや効果が、確かに自分の実感として息づいてくるようになる。こ

れが私たちの求める「深い学び」の姿です。

小学生も中学生も高校生も、それぞれの発達の段階に応じた「深い学び」の姿があります。それは、学びの過程の中で言葉の働きを発見する中で、言葉に対する認識や感性の深化・変容が起きる点で貫かれています。

ただ、この「深い学び」は学習者だけではたどり着けません。言葉の働きを教える教師としての専門性が必要です。教師は意図をもって教材を選び、表現に着目したくなるような問いをもって授業に臨みます。そして、学習者の言葉を促し、価値づけ、更に問い返す授業を構築します。これが、私たちが考える「専門性」です。「学習者の言葉」を授業の中心に据えることは、当然、毎回、同じ授業にならない不安定さを抱えます。しかし、私たちが求めたいのは、試行錯誤しながら、教材の言葉の働きに学習者とともに教師が驚き、発見し、ともに学び合いながら、学習者のみならず教師自身も成長する授業です。

山口大会は小学校全国大会・中学校中国大会・高校山口県大会の共同開催です。それによって、さまざまな校種・地域で育まれてきた国語教育に携わる仲間が結集し、豊かな経験をもちあうとともに学びあうことができます。子どもたちの言葉の学びと育ち、国語の授業像をめぐって互いに刺激を受け、触発されあう知見にもとづいて対話し、求めたい授業像を深めあう大会にしたいと考えています。